

16世紀のsyphilis

—勝山館跡の出土事例から—

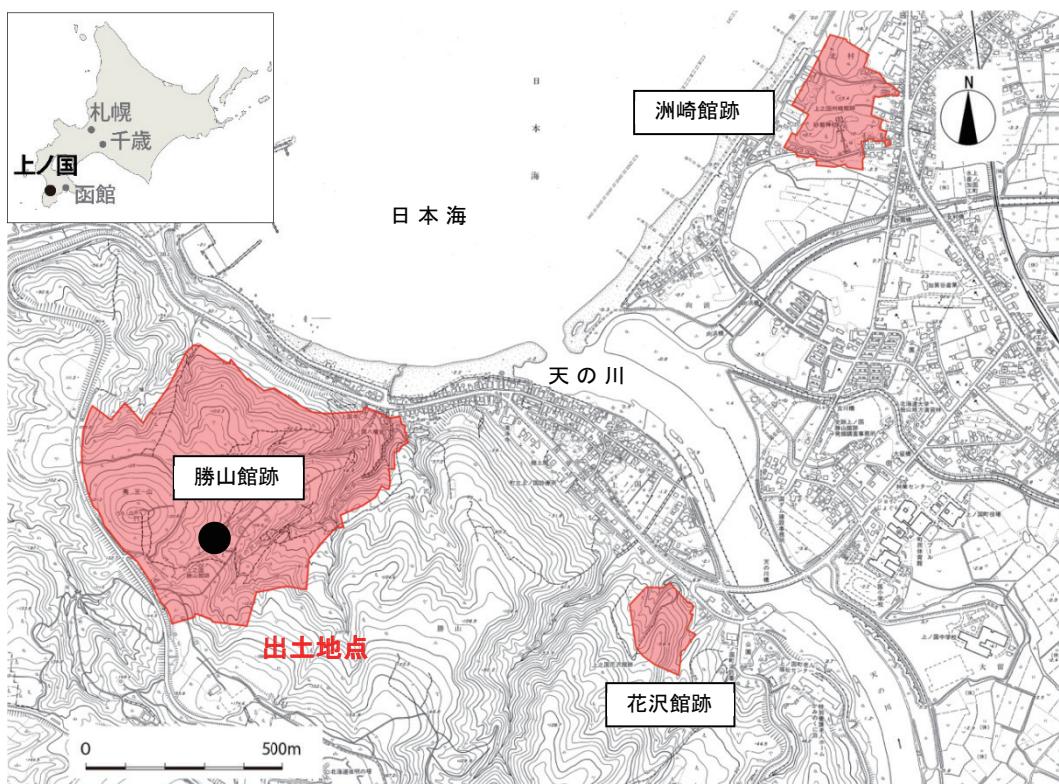
塚田 直哉

1. はじめに

2020年1月9日に中国で検出された新型コロナウィルスは、瞬く間に南極を除く全大陸に蔓延し、世界保健機関（WHO）によって3月11日にパンデミック（世界的大流行）が宣言された。2022年9月7日22時20分の時点では、感染者606,422,370名、死者6,506,327名（ジョンズ・ホプキンス大学HP発表）と爆発的な増加をみせている。

このような感染症は、2009年の新型インフルエンザや2012年の中東呼吸器症候群（MERS）などが記憶に新しいものの、実際には古くから人間と関わってきた歴史を持つ。日本国内では、青谷上寺地遺跡（鳥取県鳥取市）で弥生時代後半の遺構から既に結核の病変が認められる人骨が出土している（谷畠・鈴木2004）。

一方、北海道では戦国時代（15世紀末～16世紀）に機能した勝山館跡（上ノ国町）から性病のひとつである梅毒に感染した人骨が出土しており、道内最古の感染症の事例として紹介したい。



第1図 遺跡位置図及び骨梅毒出土地点

2. 遺跡の概要

勝山館跡は、十三湊（青森県五所川原市）に代わる北日本の政治・軍事・交易の拠点として、松前氏の祖武田信広が1470年頃に築城した山城である。史跡整備に伴う発掘調査では、200棟を超える掘立柱建物跡、約70基の竪穴建物跡、礎石建物跡・井戸・土壙・空堀・柵・橋・通路・貝塚（廃棄場）などの遺構を検出している。今回紹介する骨梅毒は、貝塚（廃棄場）で発見されたものである。

遺物は、中国・朝鮮・本州産の陶磁器、中国・ベトナム・琉球・長崎などで生産された銅錢の他、金属製品、木製品、石製品、骨角器、自然遺物など約10万点が出土している。出土遺物に占める舶載品の多さは、勝山館跡が中国、朝鮮、琉球、東南アジアを含んだ大きな交易圏の一拠点であったことを容易に想像することができる。



写真1 勝山館跡 骨梅毒出土地点

3. 日本における梅毒の歴史

梅毒は、梅毒トレポネーマと呼ばれる細菌が病原体となって引き起こる性感染症のひとつで、アメリカ大陸からヨーロッパ、アジアを経由して日本へもたらされたという。感染経路は、主に性行為で母子感染や輸血血液による感染も確認されている。症状は第一～四期に分けられ、感染後三年目以降の第三期で皮膚や筋肉、骨などに「ゴム腫」と呼ばれる腫瘍が現れ、感染後10年目以降の第四期で髄膜炎や脳梗塞、神経症状、心不全症状などを引き起こすこともあった。骨梅毒として人骨にその痕跡を確認できるのは、第三期の段階といわれる（谷畑・鈴木2004）。

日本における最も古い梅毒の記録は、京都の医師竹田秀慶が記した『月海録』の永正9年（1512）の条の「人民ニ多ク瘡有リ、浸淫瘡ニ似タリ。是レ膿庖・翻花瘡ノ類ニシテ、稀ニ見ル所ナリ。之ヲ治スルニ浸淫瘡ノ薬ヲ以テス。……之ヲ唐瘡、琉球瘡ト云フ」とされる（中島2005）。当時は、梅毒のことを唐瘡（とうも）や琉球瘡（りゅうきゅうも）などと呼び、この感染症が中国や琉球から日本へやってきたことを示唆する。このように、梅毒はポルトガル船によって、種子島に鉄砲が伝来する天文12年（1543）より少なくとも31年も早く日本にもたらされたことが考えられる。ただし、

実際には症状が顕著になる前からの感染が考えられるため、日本国内で永正9年以前から梅毒の感染があったと思われる。

そして、長く治療法がない病気であったが、戦後にペニシリンが普及するようになってから梅毒の苦しみや恐怖から人々は解放されたという。

4. 勝山館跡からみつかった梅毒の病変が認められる人骨

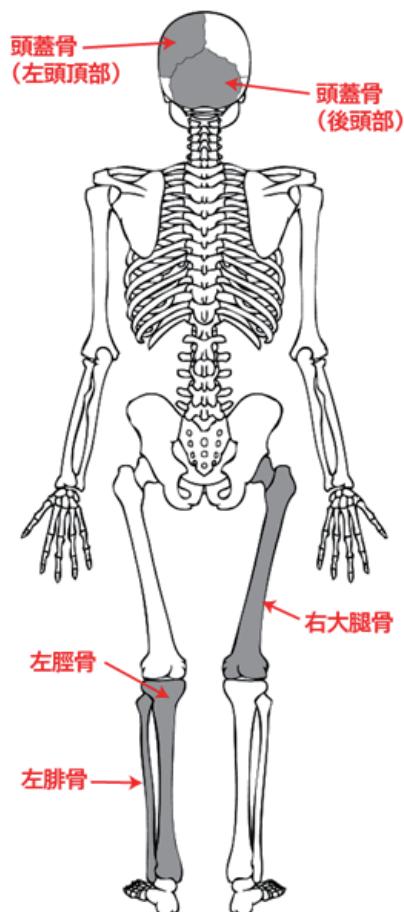
梅毒に感染した人骨は、昭和57年（1982）の勝山館跡の発掘調査で堀手周辺の沢に形成された貝塚（廃棄場）から頭蓋片、右大腿骨、左脛骨、左腓骨が出土している。人骨の鑑定をした鈴木隆雄は、形態学的な特徴から4点の人骨が同一個体の熟年男性であり、骨表面が平滑な骨硬化を伴う膨隆（肥厚）の所見から骨梅毒と診断している（百々・鈴木 1983）。

人骨が貝塚（廃棄場）に置かれた年代は、周辺から年代観を示す最新の遺物として1560年頃に生産される瀬戸・美濃灰釉内禿皿（大窯第三段階）が出土するため、およそ16世紀後半頃と思われる。

また、この人骨が出土した周辺では土葬墓が複数構築されているにも関わらず、梅毒を患っていた人が墓に埋葬されなかつたのはどのような理由だったのだろうか。梅毒を患っていた人の埋葬に関しては近世の鍋被り葬が知られているが、それより遡る勝山館跡の事例は中世の梅毒症に対する当時の人々の考え方や葬送を考察する上で非常に興味深いものである（桜井 2004）。

さらに、勝山館跡まで梅毒がもたらされたのは、本州方面からの搬入品の多さから推測すると、梅毒に感染していた商人などが交易で本州から渡海し、勝山館跡の人々と関わることで伝播した可能性が高い。

いずれにしても、この事例のみでは館内で感染がどの程度拡大していたのかを窺い知ることはできないが、この人骨は当時の人々の国や地域を越えた活発な交流を物語る貴重な資料といえるのではないだろうか。



第2図 骨梅毒がみられる部位

引用・参考文献

- 百々幸雄・鈴木隆雄 1983 「勝山館跡出土の人骨及び動物遺存体」『史跡上之国勝山館跡IV』 pp.61-66
上ノ国町教育委員会
- 櫻井準也 2004 「近世鍋被り人骨について」『墓と埋葬と江戸時代』 pp.61-66 江戸遺跡研究会
- 谷畠美帆・鈴木隆雄 2004 『考古学のための古人骨調査マニュアル』 pp.134 学生社
- 中島陽一郎 2005 『病氣日本史』 pp.82-85 雄山閣

Syphilis in the 16th century —Excavated examples of Katsuyama castle—

TSUKADA Naoya

Abstract

A case study of 16th-century bone syphilis excavated from the site of the Katsuyama castle located in Kaminokuni town, southwestern Hokkaido. Takao Suzuki, who examined the human bones, determined from the morphological characteristics that the four human bones belonged to the same mature man, and from the findings of the bulging (thickening) accompanied by osteosclerosis with a smooth bone surface, he diagnosed osteosyphilis.

In addition, several burial tombs have been constructed in the area where the bones were excavated, but the person suffering from syphilis was not buried in the grave. Regarding the burial of people with syphilis, it is known that they were buried in pots in the edo period. The case excavated of Katsuyama castle is a valuable example in considering the way people thought about syphilis and the funeral procession in the muromachi period.



写真2 骨梅毒頭骨片



写真3 左頭頂骨の病変部位（拡大）



写真4 大腿骨の病変部位